

実践報告

札幌市立宮の森小学校

(1) 研究内容

研究課題：「学校にアイヌ民族の方を招いて行う体験的学習の研究」

- アイヌ文化について正しい知識を得て、理解を深めるとともに、北海道の先住民であるアイヌの社会や文化を尊重する態度を養う。

(2) 実践の内容

【実践①】アンコラチメノコウタラの方たちとの交流について

○ ねらい

アイヌ民族の方を招き、アイヌの子どもの昔遊びを体験することで、遊びが狩猟に結び付いていることに気付くとともに、自然を大切にするアイヌの考え方をすることでアイヌの社会や文化について捉えることができる。



○ 学習内容

＜アイヌの楽器や踊りの実演・体験＞

アイヌの楽器「ムックリ」の演奏を聞いた子どもたちはその独特な音色に集中し、音の出し方をじっと観察した。また、アイヌ民族の古式舞踊についても体験する中で、歌や歌詞にどのような意味があるかということを教えてもらい、繰り返し出てくる歌詞と一緒に歌ったり、踊りについて一緒に踊ったりしながら、アイヌの文化を感じ取っていた。

＜アイヌ民族や暮らし、生活についての講話＞

アイヌ民族の北海道の暮らしや生活の様子、服装等についての話を聞く中で、子どもたちは社会科の学習で学んだこととつなげていた。中でも、女性が身に付けるアクセサリに興味をもち、アイヌが身に付ける装飾の意味について考えていた。

＜アイヌの昔遊びの体験＞

アイヌ古来の遊びを二つ教えてもらった。「カリブ」と「縄跳び」である。カリブは木の棒を使った輪投げ遊びであり、縄跳びは現在も親しみのある長縄跳びである。どちらも大人になる時に狩りにつながる動きになるということで、子どもたちは、獲物を狩る行動と心情に思いを寄せながら遊びの体験に取り組んだ。

(3) 研究のまとめ

① 成果

- アイヌ民族の方の話を直接聞くことで、子どもたちのアイヌの学習がより身近なものとして捉えていた。
- アイヌ民族の方の話し方も親しみやすく、昔遊びの道具を実際に使う体験をさせていただくことで、子どもは楽しみながら学習を終えることができた。
- 単元の中で体験したことを生かせるよう構成したため、事前学習と体験活動がつながり、「アイヌ民族の方は…」と事後の学習でも体験と関連付けた発言が出るなど、より主体的に取り組む姿が見られた。



② 課題

- 昔遊びに浸る時間や、もっと多くの歌や踊りに浸る時間を確保することで、子ども一人一人がアイヌについてより考えたり、自分の思いをもったりすることが可能になると感じた。



③ 提言「人権教育のすすめ」

- 今回は社会科の学習の中での「人権教育」について考える場を位置付けた。実際に見たり直接話を聞いたりする体験は、子どもたちに強い印象を残した。また、子どもたちが体験活動で学んだことを教室で、ひいては北海道に住む道民として生活する中で、関連させることができるよう、学習を構成することがより大切であると考えます。